

平成 31 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる
「共同研究班」 研究報告書

令和 2 年 4 月 21 日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシアにおける言語接触・言語圏に関する共同研究		
担当者	氏名		所属機関・職
	1	野町素己	スラブ・ユーラシア研究センター・教授
班員	氏名		所属機関・職
	ヨフコバ四位エレオノラ		富山大学・教授
	専門とする研究分野		
	対照言語学		
研究テーマ			
ブルガリアのメディア言語をめぐる問題			

研究成果の概要

1989 年に始まった東欧の民主化に伴う社会変動はその地域の言語にも変化をもたらした。その変化は、言語の様々な側面に現れ、文法形式の使用にも及んだ。本研究の目的は、社会変動が原因となり引き起こされたブルガリア語の変化、とりわけ、文法形式の使用に見られる変化をメディア言語の観点から考察することである。本研究の目的のため、ある特定の文法形式、すなわち-I 分詞の形式の使用に焦点を当て、次の課題を遂行した：①ブルガリアの民主化後の新メディア（オンライン新聞）における-I 分詞の使用およびその変化の特徴（口語的用法の拡大）について調べた。調査の結果を、下記の 1）として、10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies において発表を行った。さらに、令和元年 8 月には現地調査を行い、ブルガリアの民主化（1989 年）以前に発行されていた新聞における-I 分詞の使用について調べた。調査は、国立図書館"Св. св. Кирил и Методий"およびブルガリア語研究所で行った。膨大な新聞データから、1 紙（Работническо дело）に絞り、ランダムに、1989 年から 1972 年まで遡り、Работническо дело の記事を調べ、用例を抽出した。調査は限られたメディアを中心に行われたので、結論付けるのにデータが不十分であるが、民主化（1989 年）以前のメディアにおける-I 分詞の使用は、新メディアと違い、全体的に極めて限られており、また、本来の機能である「伝聞」が主であることが確認された。今回の調査の一部を平成 29 年度の「共同研究班」の研究の成果とまとめ、以下の 2）で発表した。

以上の南スラブ語の状況と比較対象研究を進めるにあたり、ポーランド語、ロシア語といった北スラブ諸語の専門家、地域言語学も専門とするダニエル・ワイス名誉教授（チューリッヒ大学）を招へいし、3 月に北海道大学および日本スラブ学研究会（於：東京大学）で講演会（題目はそれぞれ The Inexpectative Construction of the Type Russian *Koška vzjala i umerla* and Its

Circumbaltic Affiliations および The Polish “Newspeak” against its Soviet Counterpart: Commonalities and Differences であった) 合わせて今後の当該領域における共同研究についての意見交換会を予定していたが、コロナウイルス問題によりワイス氏の来日がキャンセルになったため、この計画は実現しなかったが、今後別の方法で招へいおよび共同研究を試みる。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

1)Yovkova-Shii, Eleonora, (Panel) Language Diversity in an Unstable World – A Case Study from the Balkan Area, “The Functions and Meanings of the Evidential (-l participle) Forms in the Texts of the New Bulgarian Online Media” .The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies （東京大学、2019.6.30)

2)ヨフコバ四位エレオノラ、「社会変容と言語問題ーブルガリアのメディア言語の観点からー」富山大学教養教育院研究紀要第1号 (2020.3.12)、pp.1-10 [※謝辞あり]

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。